にいって資本主義社会と社会主義社会との価値体系の対立においてはどちらが進歩的でどちらが退歩的であるかは簡単にはいえない。しかも社会主義、唯物論といわれるものは資本主義社会のうちから生まれてきたものであり、資本主義社会と共通のものが多い。例えば人間性の自覚とか人権の尊重とか技術の合理主義的な計算などの面で市民社会と多くのものを共通なものとしてそれぞれのうちに含んでいる。しかもそこには共通するものがあるにもかかわらずたたかいがある。我々は単にどちらがよりよく、どちらがよりわるいという単純な価値判断はくだせない。

私は別にどちらがよいとかわるいとかいうのではなく、これは我々自身の世界観により決定するほかはないと思うが、ただ私の提案したいことは、第一に価値の論争は権力の闘争から解放されねばならないということである。権力の闘争が伴う限りは妥当な価値の判断はでてこない。第二、価値を我々は存在の場にうつして考えるということ、つまり価値的な見方というのははじめから善いとか悪いとかいうようにとかく主観と結びつきやすいので我々は価値判断を下す場合には互いに対立する意見を純粋な存在の立場で考えてみる必要があるということである。そういう意味で価値判断よりも先ず先に存在判断というものを先行させることが大事である。ギリシア人はかって行動よりも観想の生活というものを重んじた。これは例えばオリンピアのゲームで競争する人間より見ている人間の方が高等であるということである。これは要するに理論は公平に見ることを意味している。我々は行動する場合にはとかく自分の利害にとらわれるものだが、それを戒めて、問題のあり方を公正に考え、我々自身のあり方、あるいは社会のあり方をあくまで論理的に理解した上ではじめて正当な価値判断が下せるのでないかと思う。

明治時代に於ける千島開教

藤島達朗

本学が行なった昭和三八・三九年度の文部省の科学研究の「近代仏教の形成に関する綜合研究」で、開教伝導の部門を担当し、資料蒐集のため今年二月に佐賀県唐津市高徳寺を訪ね、奥村円心師の開教に関する資料を調査した。そして「千島国布教日誌」（明治三二年四月一一日―明治三四年八月二四日）二冊を発見した。周知のように奥村円心師は、明治以後はじめて朝鮮に開教した人で、戦前まで東本願寺が朝鮮に於いて圧倒的な布教の業績を有したのは、ひとえに師の献身的な努力によるものである。しかしその千島布教については従来あまり問題にされず、明治三〇年、師が朝鮮最後の開教地光州に開教の基礎をきずいて退き、その開教事業は終ったとされていた。しかし当時の「宗報」を見れば、師が明治三一年四月三〇日付で東本願寺より千島国シコタン島出張の辞令を受けたことは歴然としており、師は六十歳近い老軀をもって寒冷障僻の地に赴き、布教に努力しているのである。

千島人はだいたいアイヌ人で、穴居生活をし、文盲で勤労意欲

がなく、動物的生活をしていたから、布教とはいえ、はじめは原地人（土人）の人間教育であり、いかにして彼らを人間として育てるかに努力がはらわれた。従って所謂布教をはじめたのは半年ほど経過してからで、その間は忍耐強く時機を待ち、自ら進んで押しつけようとはしていない。この点さすがに開教のベテランといえよう。

もともと円心師は一八四三年（天保一四年）唐津市高徳寺に生まれた。若い時九州の秀才を集めた広瀬淡窓の日田咸宜園に学んでのち、京都高倉学寮に在籍、のち東本願寺に入り教学の録事をしていた。その頃近代大谷派の二大宗政家として渥美契縁師と並び称される石川舜台師は、当時新門であった現如上人を擁して欧米を視察し、帰朝後は東本願寺の枢要な地位につき、海外布教に力を注いでいた。そして布教局を設け外事布教係が特別に設置され、その路線に於いて大分市戸次、妙正寺小栗栖香頂師による中国開教が一八七六（明治九）年からはじまり、続いて近世まで真宗を禁制していた薩摩の開教や田原法信師による琉球開教、さらに円心師による朝鮮開教等が行われたのである。

さて円心師の祖浄心は早く本願寺教如の命により一五九八（慶長三）年朝鮮釜山に開教している。これはいうまでもなく文禄・慶長の役の時のことで、その出兵失敗と共に浄信も引き揚げ、領主寺沢氏の懇望によって城下唐津に創寺してこれに住した（現在唐津高徳寺に浄信が教如より下付された親鸞聖人の絵像が伝えられている）。石川舜台師は浄信のこの故事をもって、円心師にそれをすすめ励ましたのであった。

ところで朝鮮釜山には当時日本人は在住しておず、布教は第二段階で、第一には原地人と共に生活しそれを助けることからはじまった。そして一八七九（明治一二）年元山開教、以後仁川・木浦・光州とその開港と共に開教し、朝鮮五別院のうち円心師の関係しなかったのは、京城別院のみであった。師は開教に当り、その基礎ができると次の開教地に赴任し、一ヶ所に定住して財をなすということはしなかった。

石川舜台師の政治的ライバル渥美契縁師は、舜台師の積極性に対してどちらかといえば保守的な性格で、両者は交互に宗政を担当している。そして舜台師の積極的事業がようやく緒につき育成の段階になると、契縁師が出てそれがやがて頓挫するという経過をくりかえすのであるが、一八九七（明治三〇）年白川党事件後、舜台師が出て積極策を打出し、朝鮮開教から帰った円心師を千島に派遣することとなった。

元禄の松前藩郷帳によれば、千島はクリミセ島三四島をかぞえているが、林子平は明らかに「千島」といい、三七島をかぞえるとしている。ロシアはイワン三世時代にシベリアを経略し、一七世紀初頭にはシベリア全土を領土とし、カムチャツカに至っている。そして一八世紀初頭（正徳元年）に千島シュムシュ島を占領し、さらに南方に手をのばしてくる。これに対して千島アイヌは勇敢に抵抗しているが、一八世紀末（安永八年）には、ついにウルップ島まで占領されてしまう。

この頃になると、日本側でも北方の急に鑑み、間宮林蔵や近藤重蔵らが千島や樺太の探検を行なっている。ロシアでも千島の中心クナジリ・エトロフをめざして迫まり、一八一一（文化八）年軍艦をクナジリに寄せるが、艦長ゴローニンは日本側に捕えられた。翌年ロシアは軍艦を派遣し、ゴローニンの返還を要求するが、日本側が応じないので高田屋嘉兵衛を捕えて帰った。一八一三（文化一〇）年ゴローニンと高田屋嘉兵衛とを交換して問題は落着するが、ロシア側では、千島の第一島から第一八島までをロシア領として主張している。

一八五四（安政元）年プーチャチンが長崎に来航して開港を要求するが、一度幕府に拒絶されたけれども下田に廻航して強圧し、ついに日露和親条約が成立した。その結果、ウルップ島以東はロシア領とし、樺太は所有権に触れずに両国人の雑居を認めあった。ついで一八七五（明治八）年千島・樺太交換条約により、千島全島は日本が領有し、樺太はロシア領となった。（その南半を日本が領有するのは明治三七・八年戦役後である）。かくて千島は一応日本の領土になったけれども、ロシア占領中ギリシア正教の教会が建ち、原地人の姓名もロシア語でするなどロシア化されていたから、それをまず日本化する必要があった。一八九三（明治二六）年海軍予備役郡司成忠大尉（幸田露伴の兄）は報効義会を組織し、二百余人を率いてシュムス島に永住覚悟で赴いた（南極探検をめざす白瀬中尉も寒冷に耐える訓練のため同行した）。しかし準備と調査不足のため、きびしい気候に健康を害され、脱落者がふえて失敗した。

明治三十年代の千島の人口はエトロフ二二六〇・クナジリ二〇七〇・シコタン一五〇・ウルップ二・シュムシュ八六で他は無人島であった。そして一八八四（明治一七）年シュムシュ島の全員をシコタン島へ移住させたので、ウルップ島以東は無人島になった。シコタン島へ移住した原地人に対し、政府は住宅・生活費を支給したが、穴居生活に慣れ、懶惰で酒を好む彼らには、人間教育の必要が痛感された。即ち宗教界にその開教を訴えたものと思われる。朝鮮開教のベテラン奥村円心師の起用もその点にあった。

円心師と共に千島に赴いたのはその夫人と随行僧岸田某氏、それに報効義会の会員であった竹田寅蔵氏とで一行四名であった。「千島国布教日誌」は岸田氏の手になり、毎日の天候・気温をはじめその生活が要領よく書かれている。

一八九七（明治三〇）年四月一一日京都を出発、青森より函館に出て、船で根室を経てシコタン島に着いたのが五月一六日であった。円心師が本山に送った「土人撫育見込書」によると、それは開教というより撫育するということで、原地人男女に姓名をつけること、穴居生活をやめ、家屋に畳を敷き着坐生活させること、言語・衣服を内地人と同様に改めること、貯蓄・衛生の心を養わしめること等を目標にしている。それは生活の根底から改め、更にそれを育成しようとする遠大な方向であった。

最初は彼らに接触して信頼を得ることが大事であった。乏しい開教費の中から物品を調達し、男には酒・タバコ・砂糖・麦粉を、

女に帯・櫛・前掛・木綿・手拭・石けん等を与えた。そして日本見学のため酋長二人を連れて東京・京都に赴き内地に親しませて大きな効果をあげている。なおギリシア正教の教会では、その見学を阻止しようとしたが、円心師の明確な論理の前に退いている。次に怠惰でただ魚類・野禽を捕えて常食するのみの彼らに、馬鈴薯・そば・大根・甜菜等の栽培や、漁撈の方法の伝授につとめており、それは正しく生活全体の指導であった。

しかし気候はきびしく、十一月から五月まで雪にとざされて西北風が強く、八月から十一月まで月二回の船便も十二月・一月には月一回となり、二月から五月までは氷結のため欠航し、交通は途絶してしまう。越冬中は野菜が不足して脚気になり、円心師も足部が脹れて呼吸が困難になった。一九〇〇（明治三三）年五八歳の円心師は体力の限界を痛感し、翌年の開氷期の入船を期して転任を申し出ている。

開教も明治末期よりのそれは多く日本人を対象としたのであるが、円心師の開教の場合は最初から原地人が相手であったから、その第一歩からはじめなければならなかった。即ちはじめから布教はせず、ひたすらその時機を待ち、相手の成育をみている。一九〇〇（明治三三）年の本山への予算上申書によると、総額一四六八円八三銭のうち、撫育費一〇〇〇円・事業費六〇〇円・道路開さく（シャコタン―松ケ浜間）費二〇〇円・給与物品費二〇〇円・事務費その他五〇〇円で、予算の大部分が撫育費に当てられており、よくその性格を示している。

大凡明治仏教は、近世末の激しい排仏の思潮がきわまり、仏教は無益有害、僧徒は遊民なりとする世論を背景に所謂廃仏毀釈の惨をみたわけで、仏教界はこれにいかに対処するかにかかっていた。その対応の一つとして各宗が海外の開教伝導をはじめたが、中国・朝鮮・琉球・千島・北海道等の一連の開教事業は全て東本願寺によってその先鞭がつけられたといって過言でない。

開教事業は費用がかかる。東本願寺は一八六四（元治元）年に全焼し一八九五（明治二八）年にやっと伽藍が完成したのであり、その借財は大きく、財政は極度の窮乏をつげていた。しかしもともと東本願寺は江戸幕府と密接な関係にあったので、明治維新後はその立場が悪く、他宗に超えて国益の方途を打出さねばならない事情もあった。その開教については帝国主義への追従という鋭い批判も出ている。併し東本願寺の活動は単に開教の面のみでなく、教学の分野に於いても、南条・笠原師による原始仏教研究の開拓、村上専精・境野黄洋・鷲尾順教師による仏教史研究、そして清沢満之師による新時代への理解等の一連の動きがあり、それはあくまで全体的な立場に於いて考察されねばならないと思うことである。